

エジプト アブ・シール丘陵頂部の発掘調査報告  
— 1991~93年の3年間の調査について —

吉村 作治\* 長谷川 奏\*\*

The Excavation Report on the Hilltop at Abusir in Egypt

Sakuji Yoshimura\* and So Hasegawa\*\*

Abstract

In 1991, the Egyptian Culture Center of Waseda University was permitted to excavate the top of a hill situated 1 km south of the 5th Dynasty pyramids at Abusir and 1.5km northwest of Serapeum at Saqqara, and three successive seasons of work from 1991 to 1993 was carried out. Excavation unearthed a building which is related to Prince Khaemwaset, the fourth son of Ramesses II of the 19th Dynasty.

The building constructs of limestone blocks. It consists of 'portico', 'corridor' and a 'cult room' arranged on an east-west axis, and is 20m long as a whole. It reminds us of the tomb-chapels of the 18th and 19th Dynasties found to the south of the pyramid causeway of Unis at Saqqara, but we have not yet found a burial chamber in the site. The question is whether the building is a tomb-chapel of Khaemwaset himself or a monument dedicated to him, and future excavation will answer it.

はじめに

早稲田大学古代エジプト調査室<sup>(1)</sup>は、1966年にエジプト各地においてジェネラルサーベイを行ない、1971年よりは毎年早稲田大学古代エジプト調査隊<sup>(2)</sup>を派遣して本格的に発掘調査を開始し、1973年にはケナー州ルクソール市西岸のマルカタ南地域において、魚の丘彩色階段を発見した<sup>(3)</sup>。その後1978年にはカイロ郊外の都市遺跡アル=フスタートを発掘調査し<sup>(4)</sup>、1980年にはルクソール市西岸クルナ村において貴族墓 241号墓のクリーニングを行なった<sup>(5)</sup>。1982年には同地区において

318号墓を含む4基の貴族墓を発掘し、100体以上のミイラおよび人骨を発見、1985年にはアメンヘテプ3世の王宮があるマルカタ地区のクリーニング調査を行なった。さらに、1988年にはクルナ村ドラァ・アブー・アル=ナーガー地区の333号墓を始めとする新発見の貴族墓(墓番号は未決定)1基を含む4基の発掘調査を行ない、1989年には王家の谷西谷におけるアメンヘテプ3世王墓のクリーニング調査<sup>(6)</sup>と、王家の谷西谷未発見王墓探査を開始した。その間1986年よりは、エジプト考古庁の要請により、カイロ郊外ギザ台地におけるユネスコを中心とした国際調査団に加わり、ギザ

\*人間基礎科学科

\*Department of Basic Human Science

\*\*早稲田大学古代エジプト調査室嘱託

\*\*Researcher, The Egyptian Culture Center

台地の調査を行なった。この稿は、ギザ台地におけるピラミッド周辺調査の延長線上の調査として位置付けられるアブ・シール丘陵頂部の発掘調査概報であり、1991年から1993年までの3年間の成果を記してみたい。

### 1. 調査の経緯

1986年以来ギザ台地において実施してきた予備調査は、電磁波を用いた遺跡探査であった。これは当初、大ピラミッド内部構造の究明の為の非破壊調査が考古局により求められたもので、以後大ピラミッド南側のポートピット、スフィンクス周辺域の調査等を経たのである。その後電磁波は地中に埋没する遺跡探査に応用され、砂漠内の厚い砂層に埋没する日乾煉瓦ないしは石造建造物に対する反応例の採集を目的とし、1989年よりはアブ・シール地域に調査地区を移して地中探査を継続していった。調査地区は、サフラー王ピラミッド北域からアブ・グループの太陽神殿に至る砂漠内丘陵部、ネフェルイルカーラー王のピラミッド

の南側から北サッカラ初期王朝墳墓群の位置する崖に至る耕地際丘陵部へと移行し、砂層内マスタバ墓の検出の可能性を検討してきた<sup>(7)</sup>。

同地中探査に加え、考古学的手法による遺跡、遺物分布調査を平行して行なっていたところ、アブ・シールのピラミッド群の南方1km、サッカラ遺跡群の最西端のセラベウム<sup>(8)</sup>の北西1.5kmに位置する丘陵頂部において王朝時代遺跡の存在が有力視されるに至った。同丘陵は、アブ・シール、サッカラの遺跡集中区から離れた砂漠内にあり、中東戦争の時にはレーダー基地として利用されたために、研究者の立ち入り自体が不可能な環境にあった。同丘陵頂部の地表面には、この軍事基地に用いられていた際に形成されたいくつかの窪み、石組みが見られており、更に散布していた石材の中に王朝時代固有のモチーフを有するレリーフ、柱片等が確認された<sup>(8)</sup>。

そこで同丘陵部において、1991年冬期より1993年に至る3ヵ年の発掘調査が計画され、出土遺構と出土遺物に対する考古学的手法と建築学的手法

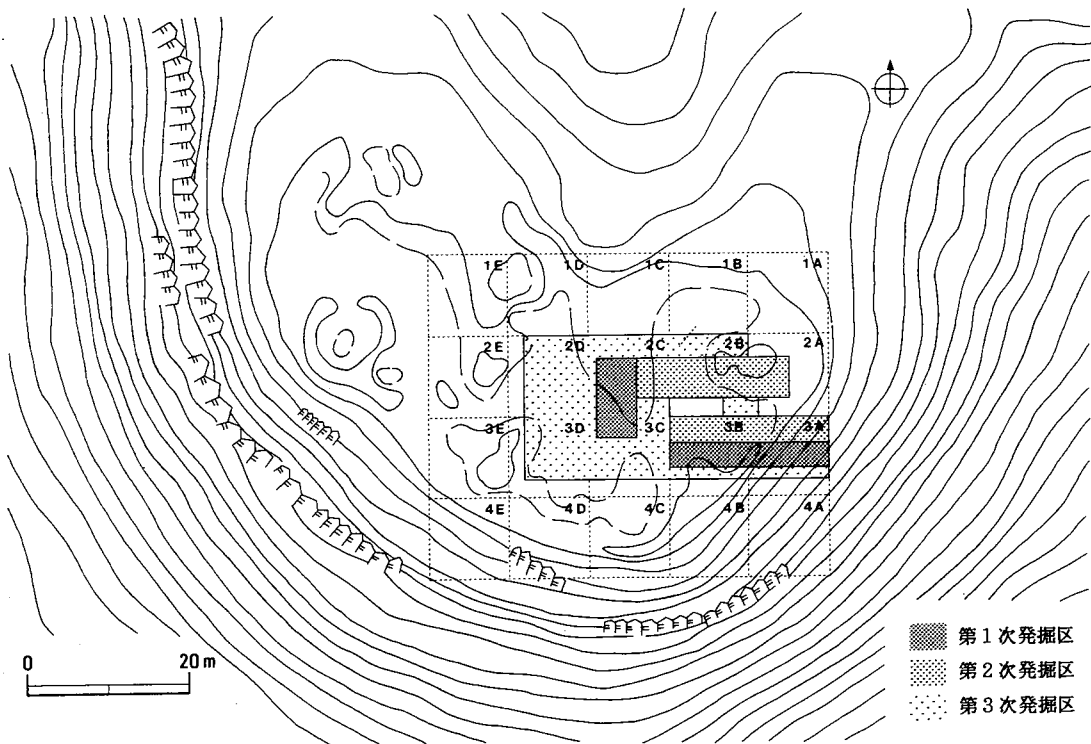


図1 調査地区の地形とグリッド設定図

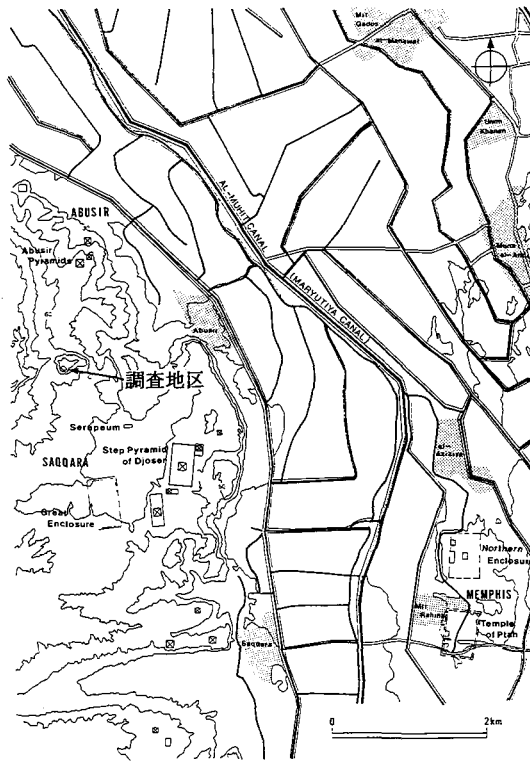


図2 調査地区および周辺の遺跡分布図

による分析を軸としながら、メンフィス・ネクロポリスにおける総体的な遺跡形成史の解明がめざされたのである<sup>(9)</sup>。

## 2. 発掘調査の目的と方法

第1次調査においては、丘陵頂部東側における王朝時代遺構の存在とその年代を確認することを目的とし、丘陵頂部東側にグリッドに沿ったトレンチを設定して、発掘調査を行なった。グリッドの設定に際しては、あらかじめ周辺地域の全体の測量を行ない、数か所の測量基準点を設けた上で、地図上の方位に沿った10m四方のグリッドを丘陵頂部全体に設定した(図1, 2)。

第1次の発掘調査は3A~3B北端の東西方向10m、幅3mのトレンチと、同トレンチを西側地区に延長した2C~3Cの4m×8mのトレンチから開始され、その結果3A~3Bトレンチでは柱礎石を含む敷石床が出土し、2C~3Cトレンチにおいても敷石床とこれに伴う壁体が検出され

たが、東西の敷石床は30cmの比高差を有し、相互の関係は明らかではなかった。

同遺構と出土遺物の検討を行なった結果、本丘陵頂部遺構は第19王朝ラメセス2世の第4王子であるカエムワセトに関わる建造物と推測されるに至った<sup>(10)</sup>。カエムワセトは当該時期の重要人物であり、彼に先立つ古の知識を愛した姿勢は後世ローマ時代のデモティック文学にも語られ<sup>(11)</sup>、更にメンフィス一帯のネクロポリスの各地にその名と称号を残す人物として知られていたが、これまで同人物に直接所属する建造物が検出されたことはなかった<sup>(12)</sup>。当該建造物の構築年代に関しては、元来3A~3Bトレンチ内敷石床に接して残存していたシルト質土面の直上で取り上げられた土器片やレリーフモチーフの仕上げ技術等の検討により、新王国時代と推測されるに至った。

そこで第2次の発掘調査では、第1次調査で検出された東西の敷石床の関係を解明する目的で、2A~2Cに幅4mのトレンチと、第1次調査時の3A~3Bトレンチ南側に沿い幅3mのトレンチを設定した。発掘調査の結果、2つの敷石床は同一の建造物に属するもので、調査区で検出された遺構は、前面の列柱室から奥室に至る構造を有し、建造物の長軸は20mを超える規模であることが判明した。遺跡を覆う層位に関しても、本丘陵頂部を覆う層位に関しては、まず現地表下約3m直下に石灰岩盤層があり<sup>(13)</sup>、同岩盤直上には拳大の自然礫を中心とした1m程の堆積層がある。同礫層には王朝時代の遺物は含まれておらず、同層が地山層と考えられた。建造物の構築に伴う層は、同礫層直上に配されるため、この地山層の傾斜面が、建造時における自然地形を形成していたと推測される。建造物は、粗砂、砂礫等の地業が行なわれた上に石灰岩を敷いて作られている。2B~2C間の層位観察によれば、石灰岩の敷石床直上には数10cmにわたる風成の砂層があり、これは建造物が廃棄されたために堆積した層と推測された。石造建造物に対しては、表層より数次にわたる攪乱層が入り込んでおり、これは比較的近年に石材取得をめざしたために形成されたものと解釈された。従って出土した建造物は基礎部を除いて概ね残存しておらず、遺構を覆う砂層には大小

の石灰岩チップ及びレリーフ片が多量に含まれていた。

これらの成果により、石造建造物の平面プランに関してはサッカラ地区における新王国時代墳墓に類似する構造が確認され<sup>(14)</sup>、遺跡を覆う層位に関しても遺跡の形成期から廃棄、破壊に至る層序の大要を得たが、埋葬施設の有無と丘陵頂部遺跡全体の中における遺構の全体像に関しては、課題として残された。

そこで第3次発掘調査では、広域な未発掘区域の中でも特に奥室と推測された後側部分のプランの解明と埋葬施設の有無を確認するため、2D～3Dに10m四方の2つのグリッドと、第2次調査区の北側区域である2B～3Cの東西方向に幅3mの2つのトレンチを設定した(写真1)。

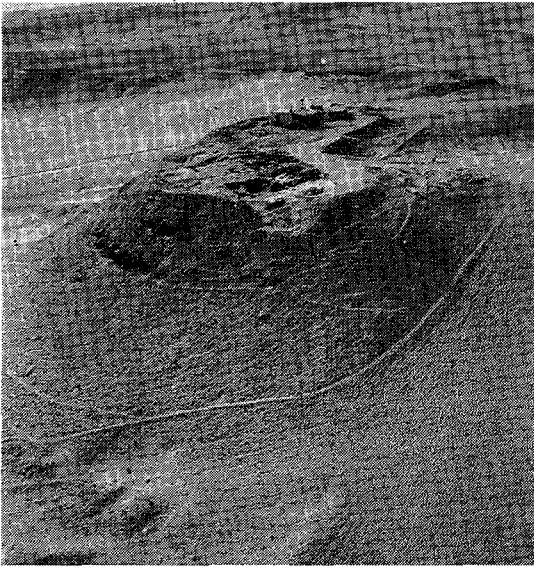


写真1 丘陵頂部遠景

発掘調査の結果、奥室周囲には埋葬施設は確認されなかったが、本丘陵頂部に遺構が建造された際の原地形の傾斜が推測され、この傾斜地形に対して人工構築層をいかに配しているかという検討から、石造建造物を中心とする遺構の主要部分の規模とプランが解明されることが判明した。第3次調査の発掘区は、北側区域においては地山面が降下していく部分に該当したため、壁体基礎の検出は今後の課題として残されたが、遺構の規模と構築技法の代表的事例が確認された。

### 3. 出土遺構

原位置で検出された建造物の平面プランは、東側より列柱遺構部分、通廊部、奥室の3つの主要部分に大別された(図4、写真2)。列柱遺構部分は、地山層の傾斜面に対しあらかじめ粗砂を配し、この上にモルタルを接着剤とした敷石床が作られている。同敷石床は、20cm程度の厚さの石灰岩のブロックが交互に並べられたもので、表面は平滑に研磨されており、柱礎石はこれらの床材に含まれている。柱礎石はあい異なる2つのパーツをつなぎ合わせており、礎石の径は134～135cmを測る。両パーツのつなぎ部分には凹みが穿たれており、この部分にずれ防止として木製の「千切り」が用いられていた。柱礎石の形態から、元来ここには6弁の束ね柱が建てられていたものと推測されたが、新王国時代には希少な例といえよう<sup>(15)</sup>。列柱遺構部分の西端には緩やかな勾配を有するスロープが残存しており、このスロープに連なる敷石床が整然とした配列を見せていることから、ここが遺構東西の中心軸と考えられた。敷石床の東



写真2 出土遺構全景(第2次調査終了時)

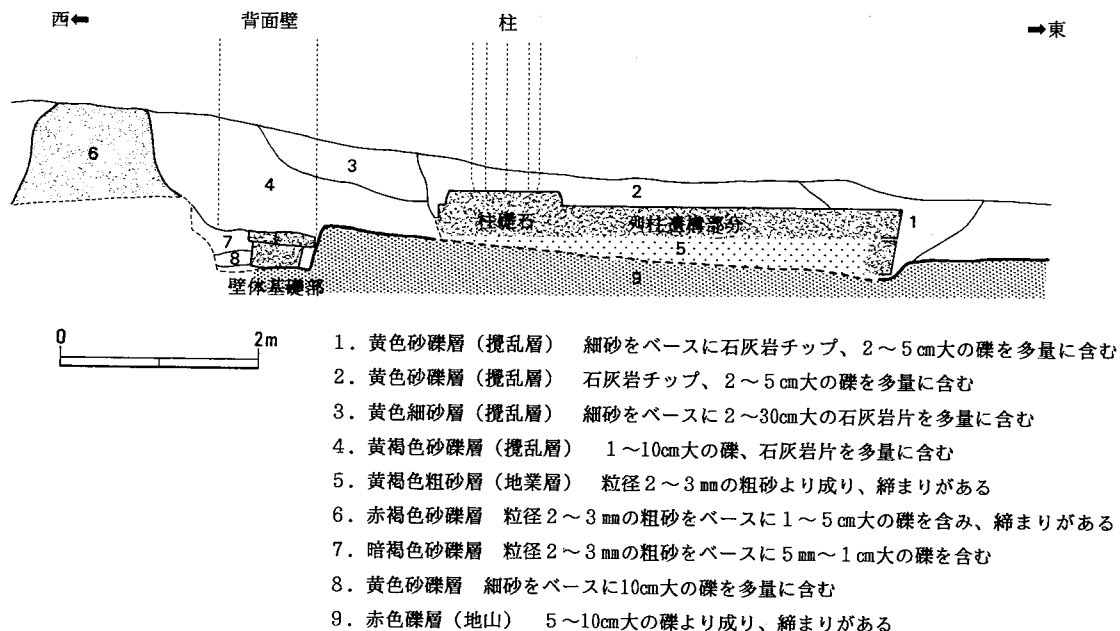


図3 列柱遺構部分周辺の土層模式図

端では、ここに地業の砂層の明瞭な砂止めが形成されており、更に南端部分においても同様の砂止め部分が検出されたことから、列柱室の南側半分域の規模は南北12m程度の規模と推測された。第2次調査までで、遺構の中心軸の半分域には、柱礎石は、破壊されて現存していないものも含めて計8箇所の存在が推測される。したがって、列柱遺構全体では、東西5m、南北24mの規模が推測され、ここには計16本の柱が2列に立ち並んでいたと考えられる。

列柱遺構部分の西端では、遺構南北軸に沿い溝状の掘り込みが検出されたが、ここには元来列柱室の背面壁があり、後世基礎部に至るまで破壊されたものと判断された。同遺構部分より西側は、通廊部と奥室により構成される。これらはいずれも基礎部しか残存していないが、敷石床に浅く刻まれた壁体構築の際の割り付け線の存在により、通廊部は5m×2.5m、奥室は3m×4m程度の規模と推測された。通廊部は矩形を呈し、列柱遺構部分、奥室との間はそれぞれ幅1.5m程に狭められ、コーナー部分を形成する壁体が一部に残存していた。一方奥室と想定される遺構部分には、床面の基礎部から立ち上がる石灰岩の壁体が2段にわた

って残存しており、同壁体の前面ではカエムワセトの銘を有する花崗岩製のブロックが検出された<sup>(16)</sup>(写真3)。奥室の北壁は破壊されており、周囲には後世再利用されたと推測される石積み遺構が残存していた。奥室の背面側にあたる2D～3Dよりは、建造物の東西軸に沿い、石灰岩ブロックの配列が一部検出されているが、奥室周辺の構造との関わりは今後の検討課題として残された。

上記した遺構の構築技法に関しては、特に地山礫層の勾配に対応する構築の在り方と、壁体基礎



写真3 花崗岩製ブロック

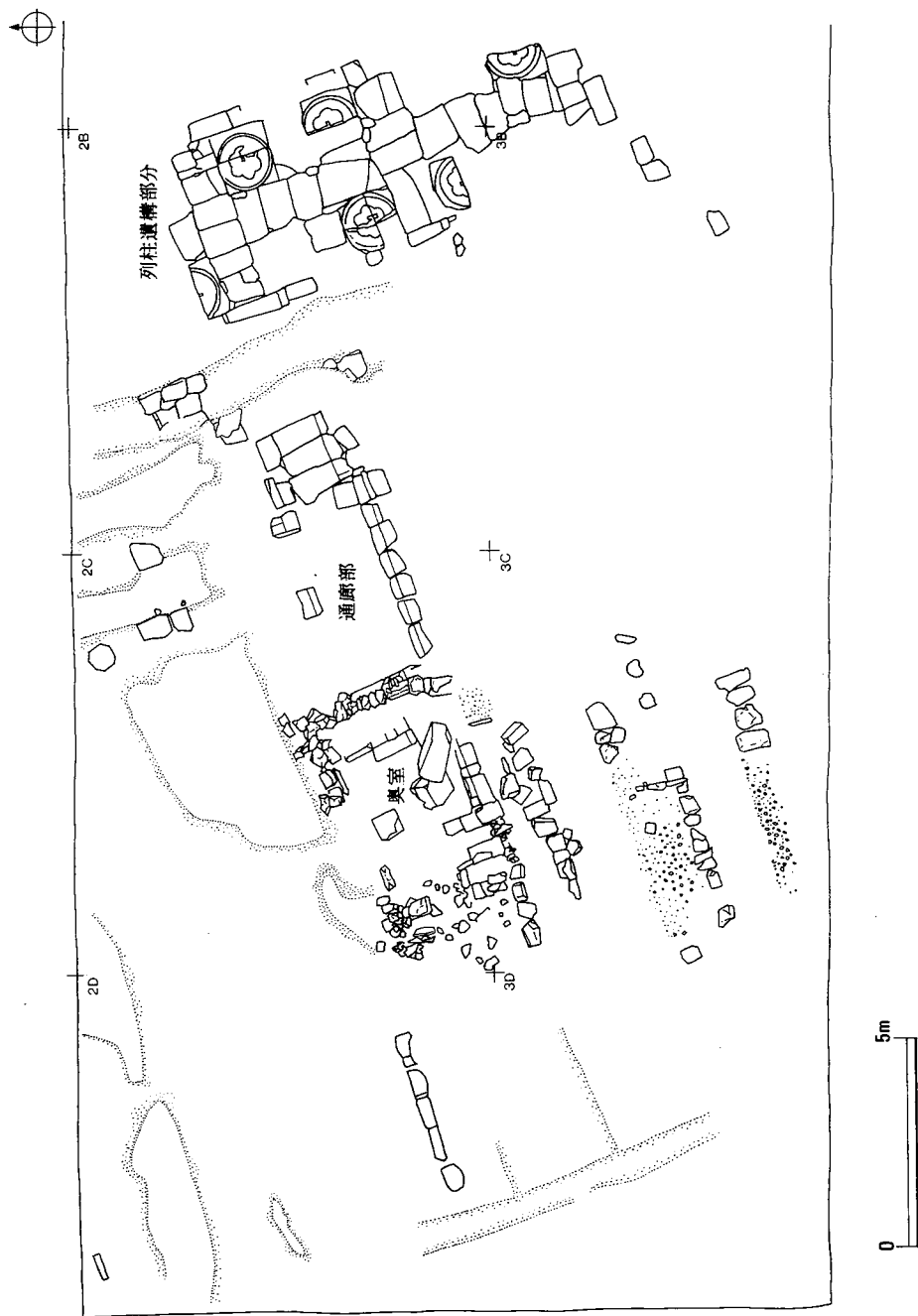


図4 出土遺構

部の構築方法が注目されよう。地山礫層は、3C、3Dが最も標高の高い地点であり、それぞれ東側、北側に向い下降している。列柱遺構部分より西側では、概ね礫層直上に粒子の細かいシルト層が薄く堆積しており、更に壁体背面部分を中心に赤褐色の砂礫層が配されていることから、両者共に建造物構築に際する人工構築層と考えられる。特に2C、2Dでは地山層が大きく下降しており、この部分に赤褐色の砂礫層が厚く堆積しており、石灰岩壁体の裏ごめまたは基礎部の土台構築として、砂礫層が丘陵部に運ばれたものと考えられる。

壁体基礎部の構築技法に関しては、さらに列柱遺構の背面壁部分にその代表的事例が観察される。ここでは、あらかじめ地山の礫層が30~40cmほど溝状に掘り込まれており、基礎部分を構成する石灰岩ブロックがモルタルにより接着されて積まれていた(図3)。これは王朝時代建築にはしばしば用いられる施工方法(Foundation Trench)と推測され、3Cで見られる石灰岩ブロックの配列を始め2C、2D、3Dにおける石造建造物をめぐる周壁部分にも応用されているものと推測されるが<sup>(17)</sup>、2C~2Dでは赤褐色砂礫層が厚く堆積しているため、壁体基礎部を確認する作業は今後の課題として残されている。

総じて建造物自体は、最前面に列柱空間を配し奥室までの構造を有しており、そのプランはサッカラの新王国時代墳墓に類似している。出土遺物からこの遺構がカエムワセットに関わる建造物と推測されるため、埋葬施設を有するかどうかは焦点となったが、これまでの所、奥室の周域一帯ではこれが検出されていない。

#### 4. 出土遺物

本遺跡よりの出土遺物は、石材関係と土器等の石材以外の遺物に大別される(図5)。

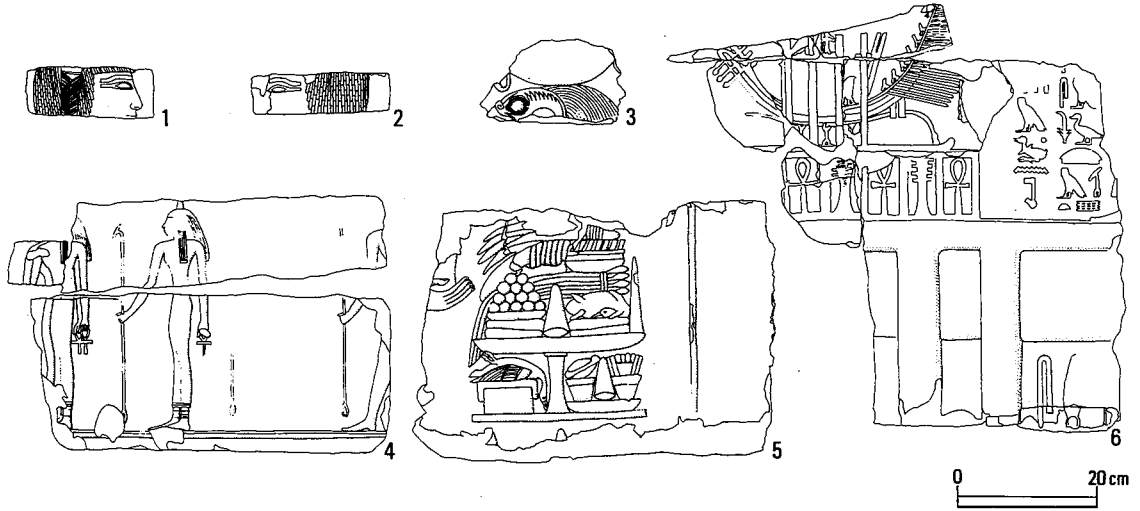
石材関係の遺物を代表するものとして、石灰岩製のレリーフ片がある。先述したように、本遺跡は近年石材取りをめざしたために形成された攪乱層が多数存在しているため、数多くのレリーフブロックが建造物を覆う砂層から取り上げられた。これらのレリーフブロックは、それぞれ異なるモチーフ、規格、整形技法により形成されており、

これらを分類していくことが壁面復元の為の基礎作業となった。

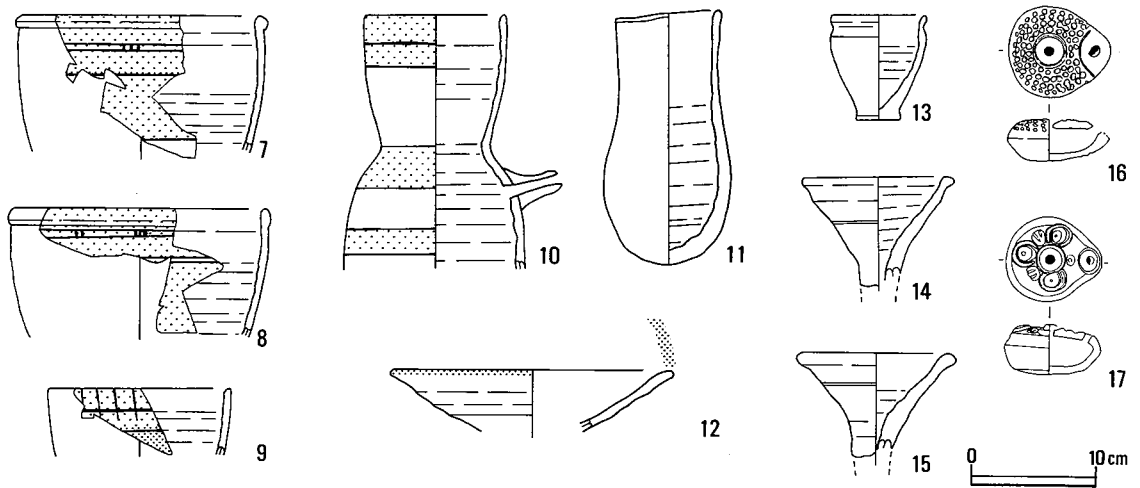
モチーフに関しては、人物および神々の像、供物の奉納場面、水辺場面等の図像モチーフに加え、これらに伴うヒエログリフの文字列がある。この中でも特に人物および神々の像のモチーフに関しては、建造物全体の問題点を含んでいる。列柱遺構部分周辺で取り上げられた、頭の横に東ね髪を付けた人物像(図5-1,2)やラーホルアクティ神の像(図5-3)は、いずれも等身大の規格を有し、表面はプラスターにより丁寧に仕上げられている。同遺構部分よりは、同様の規格と仕上げ方法の例として、供物台のモチーフ(図5-5)があり、さらには陰刻技法という異なる技法により仕上げられたニッチおよびソカリスの船が描かれたレリーフ(図5-6)が一体となり、壁面の装飾を構成していたと考えられる。一方通廊部から奥室に至る周辺では、幅45cm程度のボーダーラインの間に描かれた神々の行列場面(図5-4)と、キルトをまとった人物像等の出土例がある。キルトをまとった人物像は等身大の規格で描かれており、神々の行列場面は右側を向く群と左側を向く群に大別され、これらは神々の行列とこれを迎え受ける人物という図柄のセットを構成していると推測される。レリーフ中にはさらに本遺跡の性格解明に関わるカエムワセットの称号類が多く検出されている。その代表例は、奥室の壁体脇で検出された花崗岩製のブロックと、列柱遺構部分で取り上げられたニッチ片である。これらの中には、カエムワセットに一般的に用いられる、「王の息子(s3 nsw)」「セム神官(sm)」「職人たちの偉大なる統率者(wr hrp hmwt)」等の称号が多く確認されている。

建築石材としては、特に柱片が集中的に取り上げられ、通廊部から奥室に至る周辺では、軒蛇腹装飾を有するブロックが出土している。また建造物の基礎部分に用いられた石材として、80度程度の傾斜角を有するものが数例確認されており、これらは表面が風化のため変色しているという特徴がある。

また石材の中には、表面にインクによりヒエラティックの銘文が記される例が多数検出されており、書体からは遺構の建造時期とほぼ同時代であ



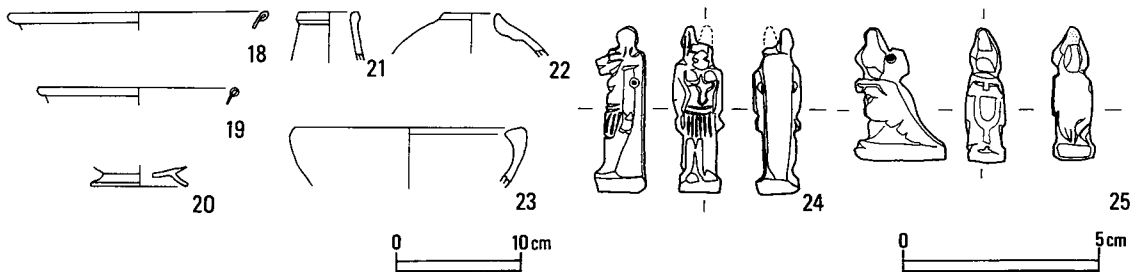
1～6：レリーフ



7～15：土器

●青色 ●赤色

16、17：ランプ



18～20：ガラス容器

21～23：ファイアンス容器

24、25：ファイアンス製アミュレット

図5 出土遺物



ることが推測されている。これらは概ね判読が困難であるが、これまで集められた例では、「3bd 3 3ht,sw 18,imy-r pr, 'Imn-w3h-sw アケト季3月18日、家令、アメンワフスウ」に代表されるように、季節、称号、人名等の組合せが多いが、これに加えて「wnmy (右)」「smhy (左)」と記された例に見られるように、建造物構築の際の作業班を意味したと考えられる銘文がある<sup>(18)</sup>。同資料は、石材原料の切り出し段階から、建造物の構築段階に至るプロセスの判読が可能な希有な遺物例として位置付けられよう。

石材以外の考古学遺物としては、土器、ランプ、ガラス、ファイアンス製品等がある。

土器に関しては、本遺跡よりの出土例は概ね残存率が低く小片として多量に取り上げられたため、器種復元のため現地にて丹念な接合作業が行なわれた。この結果、碗型・皿型土器から壺型土器に至る各種の器形が判別された(図5-7~15)<sup>(19)</sup>。これらの中には、器形、整形技法、装飾技法等から、明らかに新王国時代に位置付けられる群と、後世のローマ時代の土器群と判別されるものがある。青色顔料により彩文が施される土器群は前者の代表的事例であり、器種としては壺型土器に多く検出されている(図5-7~9)。また口縁部が赤色顔料により彩色される皿型土器土器(図5-12)、ランプ(図5-16,17)は、共に胎土は概ねナイルシルト陶土と泥灰質陶土より構成されるが、泥灰質陶土は白~緑~褐色系にわたる色調と鉱物系混和材の偏差が大きい。

ガラス製品の中には、王朝時代に固有のサンドコアガラスは検出されておらず、吹きガラスの技法による器群より構成される(図5-18~20)。ファイアンス製品の出土例も多く、これらは器類(図5-21~23)、アミュレット(図5-24,25)、タイル等に大別される。特にタイルに関しては、母胎土とガラス質釉の間に白色の石英粉末層が確認されており、新王国時代遺物と考えられることから<sup>(20)</sup>、建造物内においてタイルが使用されていた空間を検討していく必要がある。

## 5. 3ヵ年の成果と今後の展望

### — 総括として —

冒頭にも述べたように、早稲田大学によるアブ・シール丘陵部の発掘調査は、学史の上でも初めての調査例となった。調査の結果出土した遺構は、カエムワセトに関わる建造物と推測されたため、本建造物の性格説明が同人物の研究史の上でも重要なテーマとなった。建造物自体は、最前面に列柱空間を配し奥室までの構造を有しており、そのプランはサッカラの新王国時代墳墓に類似しているが、埋葬施設を伴うものか<sup>(21)</sup>、あるいはカエムワセトに献じられた祠堂(Private Chapel)であるかに関しては<sup>(22)</sup>、現在なお課題として残されている。

このため、残存している建造物の基礎部分のみではなく、出土遺物の分析を通しての復元考察という方法が、同課題解明の為の有力な手法となろう。建造物の平面計画においては、壁体基礎部の割りつけ線のあり方、モルタルの残存位置、構築技法などの分析と、建造時に用いられた度量衡(キュービット尺)から、各室の構築順序、全体の平面計画等が検討されている。また立面計画に関しては、束ね柱と壁面装飾の復元考察が大きな柱となっている。6弁の束ね柱に関しては、礎石、パネル、柱などの規格からその立ち上がり高と形態が推測される<sup>(23)</sup>。壁面装飾に関しては、建造物を覆う砂層全域から出土する多量のレリーフ片が資料となるが、ここでは石材取りをめざした攪乱層の位置関係から、元来レリーフが所属していた壁体位置を推測する手がかりとなる。これにより、カエムワセトと彼の前の神々、供物台等の場面により構成される列柱遺構部分と、神々の行列とこれを迎える人物像により構成される通廊部から奥室に至る壁面装飾の復元考察が進行している(図6-1-①②)。

第2の課題として、本遺構がメンフィス・ネクロポリスに所属していることから、メンフィス職人集団の特性が検討事項となろう。同問題に関しては、原材料の獲得から消費に至るプロセスのなかで、メンフィス地域の地理生態系および職人の技法等を対象とし、考察することとなる。石材に

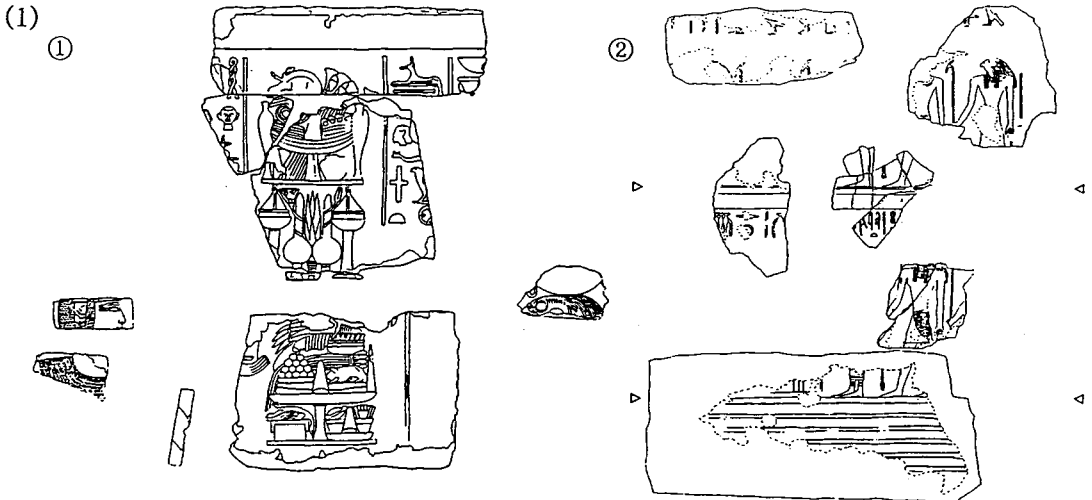


図6-1 壁面装飾の復元考察例 ①列柱遺構部分 ②通廊部（「別冊エジプト学研究」）

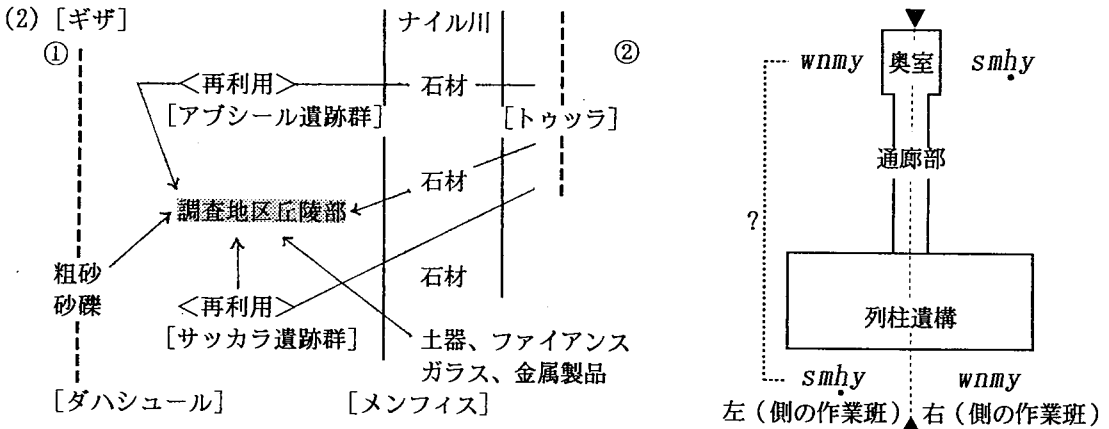


図6-2 メンフィス職人集団をめぐる問題 ①原材料の獲得から消費に至るまで（概念図）  
②建造に際する職人集団の班構成（吉村，中川，西本，柏木著；前掲書を基盤とした概念図）

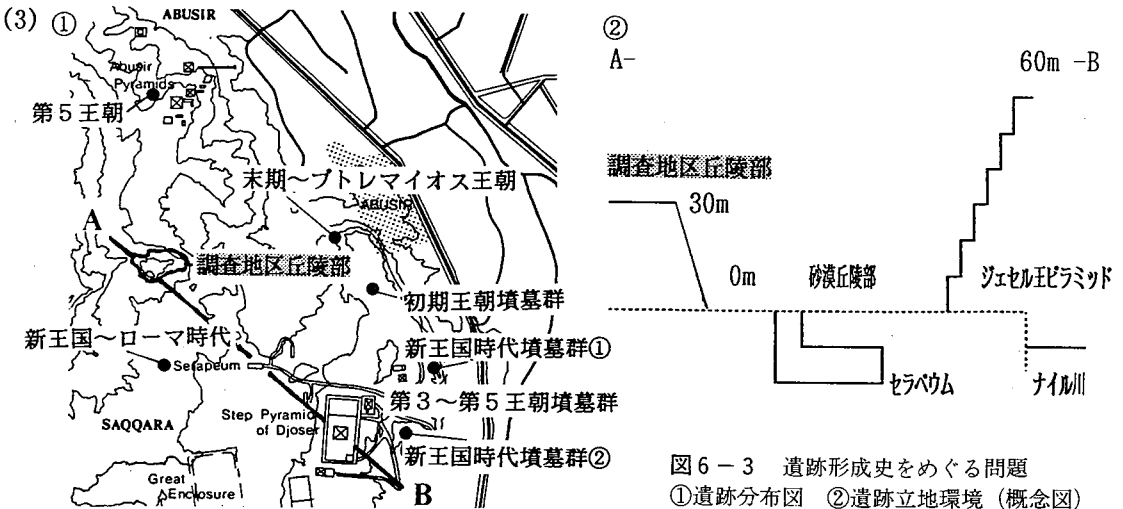


図6-3 遺跡形成史をめぐる問題 ①遺跡分布図 ②遺跡立地環境（概念図）

関しては、古王国時代より伝統的な石材供給地として知られていたトゥッラがあり、土器に加えファイアンス、ガラス、金属製品等はメンフィスを代表する工芸品として知られ、さらには遺構地業土に用いられた粗砂は、ダハシュールからアブ・シールの西部砂漠縁辺部にその獲得地を推測する<sup>(25)</sup>。また輸送の段階に関わる問題としては、一例に石材の切り出し季節が関わり、これまでのヒエラティックのインスクリプションの出土例では、ナイルの「増水季」に集中している。さらに資材運搬に際しては、遺跡へのアプローチルートの在り方が問題となるが、列柱遺構部分に面した東側斜面へのアクセス部分は未発掘であるため、この点に関しては今後の検討課題となろう。一方で、資材運用のあり方をめぐっては、遺構内の各部分において、傾斜角と風化面を有する石材が多用されており、近隣のマスタバ墓またはピラミッドよりの再利用が行なわれた可能性も考えられる<sup>(26)</sup> (図6-2-①)。また遺構建造に関わる段階としては、建造に際しての職人集団の班構成のあり方を示唆する「wnmy 右(側の作業班)」「smhy 左(側の作業班)」と記されたヒエラティックのインスクリプションがあるが、「左右」のあり方に関しては今後の遺物分布の検討を待たねばならない<sup>(27)</sup> (図6-2-②)。

第3の課題は、本丘陵部の遺跡環境とこれに伴う遺跡形成史の問題である。本遺跡はアブ・シール及び北サッカラの遺跡集中区より、互いに1.5 kmほど離れた砂漠丘陵部に位置し、周囲は涸れ谷(Wadi)に囲まれた孤立環境にある(図6-3-①)。さらに出土した建造物は周囲の砂漠標高より30m程も高い特殊環境にある(図6-3-②)。これまでの地質及び先史時代の遺跡分布調査では、第3紀においてはギザ台地と同様の海面のフォーメーションが形成されており、海退の後に、第4紀には特に中期旧石器の分布地であったことが確認されている。王朝時代以後においては、本丘陵部をめぐり遺跡集中区においてはメンフィス地域の特性として、初期王朝時代からローマ時代にわたる遺跡が複合しており、丘陵頂部をめぐり遺跡構造の史の変遷が課題となろう<sup>(27)</sup>。カエムワセトとの関わりでは、新王国時代、なかんづくラメセス

王朝期における遺跡構造が最終的な課題となるが、これまで検出されている新王国時代墳墓群は、ウナス王ピラミッドの南域とテティ王のピラミッドの周辺に集中しており、いずれとも2 km以上も離れた孤立環境にある。この点に関しては北サッカラを中心としたメンフィス・ネクロポリスの形成から崩壊に至る時間軸を対象とし、周辺時代との比較の手法を通じて新王国時代遺跡構造の特質を抽出し、この段階を経て「ラメセス王朝期」の構造解明を試みていきたい。

### おわりに

1994年は、私たち早稲田大学古代エジプト調査室アブ・シール調査隊にとっては調整の時期であった。この間に、これまで獲得した遺構、遺物のデータは再度確認され、分析、検討の為に研究会を開催してきた。さらに本年度は2度にわたって現地へ赴き、遺構の点検や、収納された遺物の図化、写真撮影、また周囲の関連遺跡との比較調査を行ない、3ヵ年の活動のまとめを行なった。そこで、この3ヵ年の発掘調査を「第1期」と考え、調査成果と今後の展望を整理してみた。

本稿はその成果の一つであり、今後の発掘調査の方向付けをするための重要な基礎データである。1995年度からは、さらに3ヵ年にわたって第2期の発掘調査に入るべく、現在準備を行なっているところである。第2期の発掘調査は、主に丘陵頂部の西側地域に拡張していく予定であるが、遺構の全貌を把握していくためにはかなりの時間を要するものと考えられる。

第1期のまとめを行なってみて、まだまだ不確定な要素が多々あり、十分に考察が行なわれていない所もあるが、これらの点は第2期調査でより明確になることを信じ、本稿を閉じたいと思う。

なお、現地における調査許可の取得と作業の進行の段階で、下記の方々のご協力を得た。

Dr. M. Bakr, Dr. A. Nur al-Din (Chairman, E. A. O.), Dr. Z. Hawas, Dr. A. Musa (Director of Giza Inspectorate, E. A. O.), Mr. Y. 'Id (Director of Saqqara Inspectorate, E. A. O.), Mr. 'I. Muhammad, Mr. I. Labib (Inspector, Saqqara Inspectorate, E. A. O.)

また本調査は、建築学手法等を総合した共同調査であり、早稲田大学理工学部建築史学科中川武教授、早稲田大学古代エジプト調査室の近藤二郎氏（早稲田大学文学部講師）、高宮いづみ氏（ケンブリッジ大学大学院生）を始めとする研究分担者の諸氏、さらには本稿の図版作成の労にあたってくれた早稲田大学文学研究科前期課程（考古学）3年白井則行君を始めとする早稲田大学古代エジプト調査室の学生諸君に謝意を表したい。

註

- (1) 主任 吉村作治 人間科学部助教授
- (2) 隊長 吉村作治 人間科学部助教授
- (3) 早稲田大学古代エジプト調査委員会『マルカタ南 [I]-魚の丘-』<考古編・建築編>早稲田大学出版部, 1983年。
- (4) 桜井清彦, 川床睦夫編『エジプト イスラム都市 アル=フスタート遺跡』発掘調査1978~1985年, 早稲田大学出版部, 1992年。
- (5) 桜井清彦, 吉村作治, 吉成薫, 近藤二郎『エジプト・クナ村私人墓群調査概報』(1)(2)「考古学ジャーナル」253号, 35~39頁, 257号, 25~29頁, 1985年。
- (6) 吉村作治, 近藤二郎『アメンヘテプ3世王墓の調査について-エジプト・ルクソール西岸, 王家の谷西谷調査報告』「人間科学研究」第7巻, 第1号, 1994年, 141~150頁。
- (7) Research in Egypt, ed. by The Egyptian Culture Center, Waseda University, Tokyo, 1991, pp.25-28, 吉村作治『モダンテクノロジーの考古学における応用-早稲田大学古代エジプト調査隊の例-』「人間科学研究」第6巻, 第1号, 1993年, 477~487頁。
- (8) 吉村作治, 高宮いづみ, 長谷川奏『早稲田大学第1次アブ・シール丘陵頂部の発掘調査』「エジプト学研究」早稲田大学エジプト学会, 第2号, 1993年, 87-100頁。
- (9) 平成3年度採択文部省海外学術研究「エジプト・アラブ共和国 アブ・シール地区におけるピラミッドおよび周辺遺跡の調査」(課題番号: 03041079) 研究代表者: 吉村作治。
- (10) 後述の「出土遺物」の項で述べられるように,

カエムワセトの人物同定にはレリーフ群中に見られる称号類が論拠となっている。吉村, 高宮, 長谷川, 前掲書, 92頁。

- (11) Lichtheim, M., Ancient Egyptian Literature, A Book of Readings, vol. III, The Late Period, Berkeley, Los Angeles and London, 1980.
- (12) カエムワセトの銘を有する歴史的建造物と記念碑に関しては, Gomaà, F., Chaemwese Sohn Rameses'II, und Hoherpriester von Memphis, Wiesbaden, 1973に集大成が行なわれている。  
また近年エジプト考古局によるセラベウムの調査成果を総合した見解として, 同人物の墓所がセラベウム近郊に存在する可能性が示唆されている。Mohamed I. A., "À propos du prince Khaemouaset et sa mère Isetneferet Nouveaux documents provenant du Sér- apéum," Mitteilungen des deutschen archäologischen Instituts, Abteilung Kairo (以下MDAIKと略記) 49, 1993, pp.97-105.
- (13) ウニ, カキ等の微化石を含有し, ギザ層との連続性が明らかとなった。森啓『アブシール, ルクソール両地域の地質学的・古生物学的基礎研究』第12回エジプト学研究会口頭発表, 1994年3月17日, 早稲田大学国際会議場。
- (14) 近年ウナス王の参道南側の地区を中心として, 第18王朝及び第19王朝の高官の墳墓が検出されている。Martin, G. T., The Tomb Chapel of Paser and Raia at Saqqara, London, 1985. Martin, G. T., Memphite Tomb of Horemheb: Commander-in-Chief of Tut' ankhmun. I, London, 1989. Martin, G. T., The Hidden Tombs of Memphis: New Discoveries from the Time of Tutankhamon and Ramesses the Great. London, 1991. Tawfik, S., "Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara: 1. Architecture," MDAIK 47, 1991, pp.403-409. さらにテティ王ピラミッド東側の耕地崖際には, 新王国時代の岩窟墓がある。Zivie, A. P. "La

- tombe d'un officier de la XV III<sup>e</sup> dynastie Saqqara," *Revue d'Égyptologie* 31, 1979, pp.135-151. Zivie, A.P., *Découverte à Saqqarah*, Paris, 1990.
- (15) 柱礎石の形態および出土した柱頭片、柱身片から、閉花式ロータス柱が建てられていたと考えられる。比較例としてはアブ・シールのプタハシェブセス葬祭殿の例が最も近いと考えられる。
- (16) カエムワセトの座像とその前後に計4列の碑銘が記されている。高さ135cm、幅86cmの大型ブロックであり、偽扉の左下部分として用いられたと考えられる。比較例としては、セラベウム出土の花崗岩製偽扉が同人物の銘と同様の図柄を有する。Goma<sup>2</sup>, *op.cit.*, Kat.30.
- (17) Foundation Trenchの用例として, Arnold, D., *Building in Egypt*, Oxford, 1991, pp.109-115.
- (18) 吉村作治, 中川武, 西本真一, 柏木裕之『アブ・シール発掘調査現場から出土したヒエラティック・インスクリプションについて』「エジプト学研究」早稲田大学エジプト学会, 第2号, 1994年, 42-49頁。
- (19) 特殊な器形でありながら, 比較的出土例の多いものにトーチがある。近年サッカラ・ネクロポリス内におけるトーチの報告例が多い。French, P. and Ghaly, H., "Pottery chiefly of the Late Dynastic Period, from excavations by the Egyptian Antiquities Organisation at Saqqara, 1987," *Cahiers de la céramique égyptienne* 2, pp.93-123.
- (20) Kaczmarczyk, A., and Hedges, R.E.M., *Ancient Egyptian Faience*, Warminsrer, 1983, Fig.33a.
- (21) Kitchen, K., "Memphite Tomb-Chapels in the New Kingdom and later," in *Festschrift fur E.Edel*, Hamburg, 1979, pp.272-284.
- (22) サッカラのウナス王参道南に位置する新王国時代墳墓群の中で, 18王朝時代の Maya と Horemheb, 19王朝時代の Tia の墓は同様の構造と共に埋葬室を有する。
- (23) 柱の立ち上がりに関しては4m程と想定される。柏木裕之, 草原千裕, 西本真一『建造物をめぐる建築学的問題』「別冊エジプト学研究」1995年3月刊行予定。
- (24) 齋藤正憲, 磯部久美子, 高宮いづみ『壁面装飾の復元考察』「別冊エジプト学研究」同書内。
- (25) Thompson, D., *Memphis under the Ptolemies*, Princeton, 1988. Petrie, W.M.F., *Memphis I*, London, 1901, pp.65-70. なお粗砂に関しては, 現在のサッカラ地区における建築工法の事例に依拠している。
- (26) 約70~80度の傾斜角を有し, これらはマスタバ墓の外壁にもしばしば見られる。また茶褐色に変色した風化面は, 例えば周辺遺跡では, イプウトのピラミッド外面に観察される。
- (27) 近年, ウナス王のピラミッド群南域に集中する新王国時代墳墓群とは異なり, 初期王朝時代墳墓の位置する崖際でラメセス2世の警護隊長であるナクトミンの墳墓が発見されている。